

いの流水俳壇

松尾 満津於 選

「当季雑詠」

親離れ早き下の子桃の花

間 浩太

(評) 幾人かの子供が育っている中の末っ見であろうか、桃の花と云い止めたところから、この親離れの早い下の子は女の児。順々と育っていく中で年上の子が、下の子の面倒をみてくれるので、親離れが早いのである。

桜は朝日が似合い、桃には夕陽が美しいといわれている。矢張り桃源は世俗を離れた別天地。子育ての対象を桃の花におさめた、この句の、のびやかさは絶品。

暮れゆきて里の灯点る代田径

刈谷 志津

(評) だんだん暮れてゆく代田径「代田」(しろた)は田植えの準備ができた田面のことをいうが、日暮れまで耕してようやく家路を急ぐ、辺りの家の灯はもう既に点っている。作者は多分そんな風景を愛し気に眺めているのであろう、さらりとした句柄であるがその中に農民の実感が籠められている。

客席は川を見下ろす藤の茶屋

片岡 包女

(評) この句の川は寧ろ溪流であろう、特定はできないが、いの町の中追溪谷あたりを想像する、溪は深く道路がはるかに高く位置を占めていた。その道路に沿った茶屋があり、溪谷の底の淵、窓の外の藤を見ながら食事をした昔を想起する。艶やかな中にどこか一抹の淋しさがある藤の花、花とはそうしたものだとは、わかっていても、観念と実感とは別、それをつきつけて見せるのが俳句かもしれない。あるがままの姿を自然の情景としてとらえた作者のところが深々とひびいてくる。新緑の最中の暑気、涼気忘れてとどろく滝のいきおいに心うばわれる作品。

山に入りて若葉越し見る仁淀川

森岡 照月

(評) 季語を象徴とか具象とか、いろいろな角度から詮索する前に、おおらかに肯定したところが、この作品の才智として晩春も、夏の暮れも、あるいは春の雨にも、何の負担もかけず、おおらかに眼前に流るる川を、そのまま写生した作品で、しかも詩情は素朴、眼前の景を一望にした。

鯉戯泳ぐ威勢や過疎の里 大川 節弥

ぐいとむ朝の牛乳夏来る 岡本とも子

菜種梅雨ミシンになじむ潤滑油 井上 郁子

新緑に抱かる安らぎ山住まい 竹崎 光子

水切りの蔵の白壁葉の桜 友草 水月

轉や旧村名の案内図 川村 博子

小児科のにぎやかなことつばくらめ 津田 久美

若葉風窓より呼びて誕生日 筒井 正子

病など忘れる若葉からの風 竹崎たかひろ

野仏のゼニゴケはがし忘れ霜 弘瀬うき子

ひとひらの落花佛足石の上 伊藤 萩甫

渦潮の来島海峡余花気振る 松尾満津於

次 題 「当季雑詠」
締め切り 毎月第2月曜日

投句先

吾北教育事務所 上八川甲2010

☎ 867-2133

今月の子ども川柳

花が咲き 学年上がる クラス替え

枝川小6年 田中 愛深

チユリツブ 緑の葉から 赤いかお

枝川小6年 刈谷 彩乃

やどきた 寒い冬から 春が来た

枝川小6年 西川 雅世

学校は みんなの笑顔が 満開だ

川内小5年 畑山麻里奈

五七五 作て遊ば 楽しいな

川内小5年 大久保美咲

秋休み どうしてなの ふぎだな

川内小4年 矢野 朋花

春が来て みんなあ心に さくらさく

川内小4年 金子あかり

遊ぶとき ににこわらっているほくが

川内小3年 池田 智貴

春になり さくらの花が まいおりる

川内小3年 坂本 明

おかしりと はばに言たよ がんばて

川内小2年 市川こうき

※「子ども川柳」は町内全小学校の児童の皆さんを対象に募集しています。たくさんのご応募をお待ちしています。(応募は学校を通じてお願いします。)